

第3回津山自分ごと化会議 議事メモ

コーディネーター	伊藤 伸
ナビゲーター	熊谷 哲
日時	令和元年12月21日（土） 13時00分から16時04分
場所	津山市役所 2階大会議室
その他	参加委員数 21名 市側出席者 総合企画部長、学校教育部長、生涯学習部長、 総合企画部・財政部・学校教育部・生涯学習部 職員

趣旨・概要

- ①第2回自分ごと化会議の振り返り
- ②公共プールのあり方について（ナビゲーターの説明）
- ③議論

総括

コーディネーター

市有プール施設全体の議論を実施。これからの津山のプールは「誰のため」、「何のため」に運営していく必要があるかを考える中で、「子どもたち」の「水に親しむため」という意見に集約された。

全体会の流れ

- 1 第2回自分ごと化会議の振り返り（構想日本による説明）
- 2 「公共プールのあり方について」
（公益財団法人笹川スポーツ財団 研究主幹/研究調査グループ長 熊谷哲氏による説明）
 - ・全国的に屋内プールは公共プールが増加し、民間プールは減少している。
 - ・屋外プールは全体的に減少し、ピーク時の半分となっている。
 - ・レジャープールは官民ともに減少し、民間でも運営は厳しく、成功しているのは首都圏・大都市圏のプールとなっている。
 - ・プール減少の理由は、その多くが1970～80年代に建設されたプールの老朽化、利用者の減少、運営収支の赤字の拡大が原因と考えられる。
 - ・笹川スポーツ財団が調査した子どもの習い事に関するデータでは、多くの親がプールを選んでおり、子どもに水泳環境を親しませたいと思っていることが読み取れる。
 - ・津山市民がプールに期待する価値は一体何かを把握しておく必要がある。
 - ・プールの価値を「競技」としない場合、施設の利用率と採算性を考えることが大事。
 - ・プールの価値を「競技」とした場合、全国大会の誘致手法や開催頻度、集客数、競技レベルの設定や県下における施設自体の位置づけなど、競技に特化した視点も含めた施設を保持する価値まで考える必要がある。
 - ・「誰のため」、「何のため」のプールなのかを整理すれば取り得る手法が明確になる。

- ・「市民全体」のプールとすると焦点がぼやけてしまうため、その中心は誰か、一体誰が主役のプールなのか、優先条件の設定を行った上で施設を有効に機能させる運営について順番に考えていくことが大事。
- ・議論の中心が、市営プールのあり方であっても、他都市の取組事例を見ると学校プールを含めて子どもを中心にプールの利用が考えられている。また市内と市外の利用者数を比較し、税金の使われ方として妥当なのか考えるポイントもある。
- ・プールの統廃合を進める上で、手法はたくさんあるが、コスト計算だけでは失敗する。コストを減らすだけでなく、どのような価値を生むか、これらを総合的に検討した上でプールをどの程度保持すべきか、議論していく必要がある。

3 議論

委) 誰のためのプールであるかを考えた時、人口減少の折、やはり子どものためと言いたい。大人は水泳に限らず、レジャーや健康増進などで自由な選択肢を色々と持っているため、これからの小さな子どもの水泳力を考えていくことが大切である。レジャー施設の運営は民間で行うものである。

委) あれも欲しい、これも欲しいという感覚ではなく、本当に必要なものは何なのか考えた方がよい。その時、一番大事な事は子どものためという視点である。

委) 水に慣れていない、泳げない子どものことを第一に考える。そのような子どもがプールになじめ、泳げるようになるためには、小学校のプールは必要である。

委) プールは子どものために考えるべき。ガラスハウスの1億円の経費を自分の家計で考えると無駄なお金。いらぬものからやめていくことをしないとお金がもたない。

委) できるだけ子どもたちが小さい頃に水に慣れることは大切であり、これは税金を投入してでも必要なこと。

委) 今、小学校ではプール授業で泳げる子、泳げない子の二極化が進んでいると聞く。津山の市営プールはレジャープールがほとんどで、泳力を養えるプールとしては使にくい。新しいプールが必要ではないか。

委) 津山の人口が減ってくる中でガラスハウスにしても、学校プールにしても若い人たちの声を聞いて考えていかなければならない。

委) 子どものこれからの考える時、レジャーというよりは、もっと泳げるように競技用の機能・設備を充実させた方がよい。

委) 何のために運営するプールかを考えた時、津山市にある全ての市営プールの目的・特性が中途半端であり、このことがそもそもの問題ではないか。

委) 暑いからプールに行くという子どもは少ないのではないか。今はほとんどがゲーム。

そのような現状を踏まえると、競技用の質素なプールがあれば十分。

委) これからの高齢化時代を考えると医療費や介護費を抑制していくために水中歩行が可能な全天候型で、公共交通機関が整備された場所に市民プールを新たに建設しても良いのではないか。公式競技が開催できる公認プールの機能も備え、プールでまちづくりが行える拠点が必要である。

委) ナビゲーターの説明の中で学校・体育施設で屋内プールが増えた理由は何か。

ナ) 学校の統廃合が進んでおり、集約をして学校施設を新しくする際に屋内プールにしているケースが多いことと、複合化して地域が学校施設を使うことを前提に屋内プールを建設するケースも増えてきている。なお、水泳部を持つ都道府県の公立高校では屋内プールを建設している傾向が強い。

委) ナビゲーターの説明の中で学校プールを住民に開放する事例では、誰が責任者になっているのか。

ナ) 常時開放する場合、特に複合化している施設では専任スタッフの配置、又は地区役員に委託しており、実施主体は行政が責任を持つことが前提になっている。

委) 学校プールは、火災時に消防用水として使用すると聞いたことがあるが、学校プール数の減少に伴い、現在の消防設備だけで地域の安全を守ることができるのか。

ナ) 昭和中期から後期まではそのような話があったと聞いているが、今日では消防設備の整備が進み対応が可能となっている。学校プールから消防用水を供給する事例は全国的にほとんどないと聞いている。

委) 学校のプール授業は民間プールを使用していけば良い。

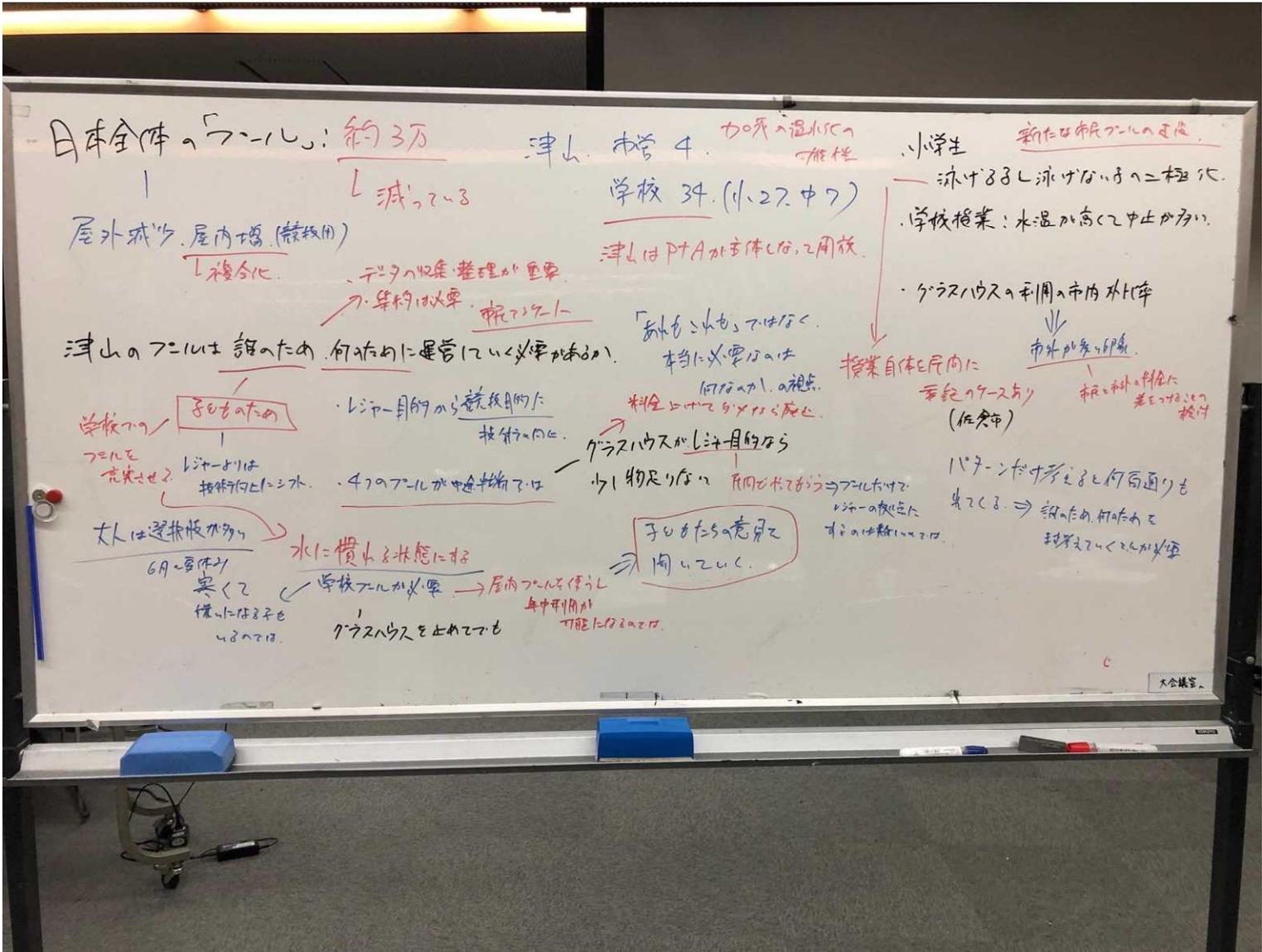
コ) 学校プールを順次減らし市営や民間プールを活用する手法は津山市では難しいのか。

市) 教育という面から言えば、小学校では子どもたちに水に親しませる、いざという時に自分の身を守るようにすることが必須。その手法は色々あるが、学校プール以外の手法をとる場合、子どもたちへの負担を考慮することも必要となる。津山の場合、これだけ市域が広い中で学校プールを集約するのは難しいため、現況では各学校に適したやり方を考えていかなければならないと考える。

委) 学校のプール授業が始まる6月はまだ肌寒く、温水シャワーではなかったと記憶する。現状ではプール嫌いな子どもをつくってしまうため、稼働率を上げるためにも学校プールの屋内温水プール化を考えても良いのではないか。

委) 小学校のプールを維持していくため、極端に言えばガラスハウスを無くして、その予算を学校施設の維持費に充てる、何でもかんでも行政に求めるのではなく、選択していくことが必要である。

- 委) 競技のできるプールが津山地域に一つあれば良い。そのような代替施設ができるのなら、ガラスハウスの廃止も考えられる。ただし、今のガラスハウスに代わるものがないなら、何も無い津山にしないため施設を維持していくべきである。
- 委) グラスハウスはレジャーの拠点としては、プールだけでは難しい。少なくとも子どものために重点的に考えていきたい。
- 委) グラスハウスは、施設の特性を活かしてプール以外の活用をしていけば良い。
- 委) グラスハウスを含め、市営プールを集約していく必要がある。ただ費用対効果で考える場合、その効果の数値化は難しい。
- 委) グラスハウスでは、ジュニアスイミングスクールや会員により目的に応じた使われ方をされているが、津山の人口密度がとても小さいため、利用者の範囲を考えると遠方者のメリットがない実態にある。
- 委) グラスハウスの存廃については市民総アンケートを実施して、その可否を確認するのも良いのではないか。
- 委) グラスハウスは、中学生や高校生がレジャー目的で使用しているため、施設がなくなるのは辛いし、津山の魅力がなくなると考える。逆に学校プールを廃止して民間プールを活用していく方が良い。
- 委) グラスハウスの利用料を上げ、今より赤字が増えるなら廃止してみてはどうか。
- 委) グラスハウスに市内の民間トレーニングジム並の設備が備わっていたら、会員が増加すると考える。
- 委) プールはできるだけ、残せるものは残してもらいたい。
- コ) 次回は、改善提案シートをまとめた上で、自分ごと化会議に参加している皆さんが市に対して提案する「提案書」の案を示し、議論をしていきたいと考えている。



日本全体のエネルギー: 約3万
↓
L 減っている

津山 市管 4
学校 34 (小27中7)
L 津山はPTAが主体で給食2周放

小学生 新たな市民プール建設
泳げない子に泳げない子への対応
学校授業: 水温が高くて中止が多い

屋外減少 屋内増 (暖房用)
L 複合化
L ティファの収束整理が重要
L 契約は必要 帳簿管理

津山のエネルギー 誰のため 何のために 運営していく必要があるか

学校のエネルギー
子どもたちの
L 学習目的から 競技目的まで
L 学習目的は 技術目的とは
L 4つのエネルギーが中途半端では

「熱も水も」ではない
本当に必要なのは
何らかの視点
料金上げて給食廃止
ガラスハウスが主目的なら
少い物足りな

授業自体は市内に
系統が2あり (佐倉市)
L 市外が多数
L 相互に料金
差をつけての
検定

大人は選択板が
6月~夏休み
早く
慣れは子ども
うらな
水は慣性
学校エネルギーが必要 → 屋内エネルギー
ガラスハウスを止めても
年中甲用が
可能に22000

子どもたちの意見
聞いていく

パターンが子どもと何回通っても
先着 → 誰のための
授業をいかに必要

ホワイトボードの写真